

ふるさと風

第57号 (2011年2月)

風に吹かれて (36)

白井啓治

『雑草だって目守れば花のきれい』

この詩は随分と前に詠んだものである。無気力で何も無いと言うふる里に重ね合わせて詠んだものである。閉鎖的に卑屈で姑息なプライドだけを振りかざし、一番大切な足元に目を向けることのできない文字だけの「歴史の里」を嘆いての詩であった。

最近になって知ったのであったが、「歴史の里」というのは県から言われたもので、市の自発的に称したわけではないので、市民たちはそう思っていない、という事なのだそうだ。

誰がそう名付けたのかは問題ではない。歴史の里と同様に「関東三天祭」と称する石岡の祭りであるが、これは石岡の人達(先著)がキャッチコピーとして付けた筈なのであるが、いつしか歴史的事実だと言いはじめ、そんなこと石岡だけの市民権だと知った途端、そう言い出したのは○○だからあいつが悪い、と言いつつ始末である。自分が暮らしている街ながら、情けなくなってくる。

先週、2月6日日曜日に、美浦村の「陸平をヨイシヨする会」の主催する縄文の森コンサートに当会兄妹の「ことば座」が招かれて、朗読舞の

公演を行ってきた。その詳しくは、風の談笑室に紹介するが、このふるさと風の会も、美浦村の陸平遺跡と同様に、ふる里をヨイシヨすることを目的に「ふる里の歴史・文化の再発見と創造を考える」として発足したのである。

我がふる里を自慢するためには、これまで自分達の都合に合致しないからと踏み潰してきたものに確りと目を向け、歴史的・文化的な検証と考察を与える必要がある。

本会報では、直接的にこのふる里に関係しなくても、そうしたテーマを頭に置いて、何でも自由に自分を述べて行くことにしているが、打田兄は日本史の中に石岡の関わりを検証していくことに取り組んでいる。また、菅原兄は、畜産獣医の立場からの視点を持って、ふる里の再生に重要な見方・考え方について述べている。また、昨年春から、鈴木兄が投稿くださり、ふる里をヨイシヨすべき意見・ご考察を頂いている。兼平聖女、小林聖女、伊東聖女もみな「おらがふる里」を必死に自慢しようと、締切日を大いに遅れながらも足元を目守(まも)っている。

どんな事、どんなものにあっても自分勝手な損得の尺度を捨てて、先ずは目守れば、そこに素晴らしいヨイシヨのあることに気付くものである。

3月6日に、当会報にも時々投稿くださる、オ

ふるさと風の会会員募集中!!

当ふるさと風の会では、「ふるさと歴史・文化の再発見と創造を考える仲間」を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、ふるさと自慢をしたいと考える方々の入会をお待ちしております。会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談・勉強会を行っております。

○会費は月額 2,000 円。(会報印刷等の諸経費)入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井啓治 0299-24-2063 打田昇三 0299-22-4400
兼平ちえこ 0299-26-7178 伊東弓子 0299-26-1659

「ふるさと風の会」 <http://www.furusato-kaze.com>

カリナ奏者の野口喜広・矢野恵子ご夫妻と一緒に「オカリナと詩の朗読コンサート」をギター文化館のコンサートシリーズの一つとして行う事になった。

野口さんは、常世の海と雑木林に惚れ込み、行方市浜に、埼玉県大宮市の方から越してこられたオカリナ奏者である。この3年間ことば座の音楽を担当してもらっているのであるが、今回初めてオカリナを中心とした朗読とのコンサートを開くこととなったのである。

それで、今回は小林幸枝の舞を意識しない詩を書いて、発表しようかと思ひ、思いつきのよう書いたのが、以下に紹介する詩である。「目守れば花のきれい」に込めた思いをもう一度詩にしてみようと思ひついたものである。

「なは愛しきもの」

名もない花はありません
あなたが知らないだけなのです
名もない花の可愛さを
私が知らないだけなのです

側溝にしがみついて咲く小花

名は何とたずぬるも 応えの見えず

名もない草はありません
あなたが知らないだけなのです
名もない草のささやきを
私が聞けないだけなのです

大地に雑草という名の草はなく

気付かれず 踏みつけられて声忘れ

名もないものはありません
あなたが知らないだけなのです
名もないものの愛しさを
私が知らないだけなのです

書き終わって野口さんに送ったら、曲をつけてみましよう、早速デスト版を聞かせてもらった。コンサートまでに間に合うかどうかは解らないが、

楽しみなことである。

ふる里に本気で元気を呼び戻したいと考えるのであれば、都合のいいものばかり、都合よく改竄してしまつたものだけを見ないで、何でも確りと目を守る、目守る(まもる)ことが大切である。それを忘れてしまつと卑屈で姑息なプライドだけを振り回すようになってしまふ。

おらが市(くじ)は、自慢の「歴史の里」と確り声してみると、本気にヨイショすべきものが見つかるとはならないだろうか。

いしおか

鈴木健

「石岡の話は、鎌倉時代の文書にみえる。当時、茨城の台地とくにいまの外城のあたりを茨城岡(うばらきのおか)と呼んでいた。それが訛つて岩岡・石岡となつたのである。」。石岡という地名の由来について、権威のある『石岡市史』上巻の序説には著名な編集専門委員長で、このように書かれてあります。石岡にはむかしから茨城という地名があり、そこに近年「ばらき台」という団地ができました。しかし、浅学な私は、鎌倉時代にもそれ以後にも、「茨城岡(うばらきのおか)」と呼んでいた「事実を見聞きしておりません。またそれが事実だとしても、「訛つて岩岡・石岡となつたのである」とは考えられません(どなたか私の誤りを教えていただければありがたく思っております)。

ともかく、立派な学者が「茨城岡(うばらきのおか)」という地名を捏造してまで自説を展開することが

あるのだろうかというこだわりと、もしその「茨城岡(うばらきのおか)」が架空の名前だとしたら、「石岡」の語源は何だったのだろうかという、そのときの疑問が、地名に関心を持つきっかけになりました。前置きが長くなりました。

奈良時代には、今の県庁のような国ごとの行政官庁を国衙または国庁といい、その所在地を国府といいました。その出現に対する地元の人たちのカルチャーショックは大きかったらしく、全国的にその後さまざまな形で地名にとりいれられました。鳥取県岩美郡(現粟子市)国府(コクフ)町・同県倉吉市国府(コウ)、栃木県栃木市国府(コウ)町・同市古国府(ラルコウ)のように、国府はコクフともコウ(フ)とも呼ばれ、一国内に複数の国府があることはそれが移転したことを示します。中世の石岡にも古国府がありました。

コウに関しては、下総国府のあつた千葉県市川市国府台(コウノダイ)は、中世以来、鴻の台・高野岱・小府代・鴻岱・高野台などと書かれてきました。安房国府のあつた同県館山市の香も同じコウでしょう。塩釜市香津町・小田原氏国府津・泉大津市高津町については前号で触れました。近世の石岡では、国府大掾・国府勢堂・国府の宮・香野大掾・香ノ大掾・香勢堂・高野勢堂・高野大掾・高野大掾・鴨の社・みなコウと呼んでいます。高浜も国府(コウ)浜が高(コウ)浜になり、タカハマと読まれるようになったのではないかと、前号に書いたところです。

コクフ・コクガについては、まず、山梨県笛吹市石和(イサワ)町(旧・東八代郡石和(イサワ)町)に注目したい。イサワ、この湯桶読みの意味不明地名の語源は何だったのでしよう。『和名抄』では「石

禾郷」とあり、読みは伊佐波（イサハ）あるいは以左和（イサワ）と出ています。禾が和になつたわけですが、禾は呉音・漢音ともにクワ（カ）で、和は呉音でワ、漢音でクワ（カ）です。漢音が両者共通であるという関係を通して、禾の呉音の方も和の呉音を借りてワと読ませ（いわゆる仮借（カシヤ）の一種です、やがて字そのものも和にあらためたのではないでしようか。いずれにしてもイシカ↓イサカ↓イサワの転が考えられます。そして、そのイシ（石）カという湯桶読みを通常の音読みにもどすとコク（石）カになります。コク（石）は国と同音です。つまり石和の語源は国衙だつたのではないでしようか。この石和を中心にして、まわりに同市春日居町国府（コウ、方八町の条坊遺構が検出されたという）、国分寺・国分尼寺があり、同じ方八町の条坊遺構がある同市八代町、国衙地名の同市御坂町国衙、一ノ宮由来の同市一宮町に国分（コクフ）などがとりまいています。ここでも国衙・国府は二転三転所在を変えたようです。能登国府のあつた石川県七尾市の国下（コクカ）町はおそらく国衙のあつたところでしょう。そうすると、平将門が独立王国を立てたとき、その国衙を置いたとされる石下町（現・常総市本石下）は、石（コク）は国（コク）に遡り、下（カ）はガなので、国下と同様、国衙であつたかと思われまゝ。

さて、わが石岡です。新井白石は、「その尊むところは、ひとえにその辞（ことば）にありて、異朝の如くその尊むところ文字にあらず。」『国郡名考』と書いています。地名の考究には文字でなく言葉を尊重しなさいということです、まさにそのとおりです。石岡という「文字」を尊重してその意味を考えると石の岡ということになります。台

地にはなつてはいるものの、町のど真ん中に波付岩を大きくしたような岩がどんとあるならいざしらず、関東ローム層といわれる洪積層火山灰土に単調に覆われているだけです。そこが、かつての国府の所在地であつたという状況のなかで、「イシオカ」という「その辞」を「尊む」とき、その由来が見えてくるように思われます。石岡の石はコクで、石和や石下の石と同様に国の転と見ます。問題は岡ですが、「上岡の卑略―神阜（かみをか）と号（なづ）く。」「此の阜（をか）に登りて、国見したまひき。故（かれ、御立岡（みたちをか）といふ。」「播磨風土記 揖保郡。このようにオカ（カ）には、「岡」とともに「阜」という字も当てられていました。そして現在でも、「阜」は岐阜市のようにフと読まれたり、長野県下伊那郡泰阜（ヤスオカ）村のようにオカにあてられたりしています。これらのことから、国府をコクフと呼んだ↓それを聞いた人がそれをイシオカと訓読みした↓それを聞いた人がそれに見えてくるように思えます。このよ

うな流れが見えてくるように思えます。まさに、白石の言うとおり、石岡という文字ではなくコクフという言葉にこそ「石岡」という地名のいわれがひそんでいたのではないでしようか。皆さんはどのようにお考えですか。あるいは、その石岡（とか高浜）はそれでわかったが、ほかの同様な地名はどうかという疑問がでるかもしれません。地名はそこに住んでいる人が生活の必要によつて名づけるもので、中央政府が画一的な理由で名づけるものではありません。したがって、同じ地名でも語源や由来は異なつて当然と考えています。似たような地名に越中国府のあつた高岡

をあげることができません。そこには現在でも古府（コフ）や古国府（フルコクフ）という大字名があるので、国府（コフ）が古府（コフ）と書かれたり、高（コ）ウ府↓高阜↓高岡になつたのではないでしようか。

このように国府とかそれにちなんだ地名は各地に数多く残っています。石岡に国府があつたことはまちがいないのですから、それにちなむ地名が残つていて不思議はないし、残つていて当然といえるのではないでしようか。ただし、それが「石岡」という名前で表に出たのは、各地の国府関連地名のほとんどが中近世になつてからであつたのと同様に、千三百年代の初めのことでした。国府ができたのは奈良時代なのに、と疑問に持たれるところですが、国府という機構が機能していた奈良平安時代には、それが地名にはなりにくかつたのではないでしようか。そうしてみると、高浜と石和は例外ということではないでしようか。

ところで過日、千葉の友人から石岡という地名にアイヌ語起源説があるという電話がありました。非常に関心があることなので驚き、早速図書館で調べました。それは、キャリアのある方がただ一人で編集執筆し、石岡市教育委員会が発行した、『石岡の地名』（平成八年）の巻頭の「総説 市名「石岡」の由来について」に載っていました。編集執筆者は、そこで「従来の諸説」として紹介した九氏の説のなかのつぎの「深谷重雄説」だけを重視しています。「古老が言うには「いしおか」とは「うしおか」と言うアイヌ語より出たもので安住の意味を表すと言う。」「石岡図書館のアイヌ語辞典を見たところ、石は明らかに「ウシユ」で、「岡は「オガ」とあつた。石岡は「ウシユオガ」と発

音されるようである。意味は石は森の多いことのようにあり、岡は広い土地と言う意味を持つようである。して見ると石岡は「ウシユオガ」で意味は広い森であって、森林あれば狩物あり、狩物あれば生活に豊かを意味する。したがって安住即ち住むに安らかを意味することになるかと解される。それにともづいて執筆者は、「諸説のうちで「アイヌ語起源説」は最も魅力的である。地名の語源をアイヌ語にのみとめることについては、柳田国男の「批判もあるが、「石岡」の場合、「遠江、武蔵、常陸等に石岡村あり」(姓氏家系大辞典)としてその地名が東日本に偏在しており、「石岡」という文言自体に限ればその語源として、ここに紹介した諸説の中では最も説得力をもつと考える。」としています。

私も、石岡の語源については、ルーツは国府ということで一九九六年と二〇〇三年におおやけにしましたが、無視されています。ありがたいことです。もしこの「従来の諸説」に紹介でもされていたら、自由にものが言えなくなりませう。

ここで問題にしたいのは、「諸説のうちで「アイヌ語起源説」は最も魅力的である。」「最も説得力をもつと考える。」としたことです。本書は『石岡市史』のなかからさらに重要なテーマを選定し、より詳しい調査・研究を行う(教育長 教育委員)が発行したもので、地名に関する市の公式見解となるものです。その巻頭に右のように書いてありました。編集執筆者は自分でアイヌ語辞典にあつたのでしょうか。それを見て石岡の「石は森の多いこと」のようであり、岡は広い土地と言う意味を持つようである」と納得したのででしょうか。おそらく、それはしていないかつたでしょう。その

ようなアイヌ語の存在に私は首をかしげ、とまどうばかりでした。たしかめもしないで「魅力的である」と丸うけし、「説得力がある」と丸なげたとすれば責任重大ですね。それが市の公式見解となつてしまつたのですから。

ほかにも重要な石岡の地名で『石岡の地名』にとりあげられないものがありますが、長くなりませうので、機会をあらためてさせていただきます。辛抱強くここまでお付き合いいただきありがとうございます。

野生の時間を取り戻せ！

菅原茂美

2008年1月号の本会報で、私は「時間という財産」の持ち合わせが、世界中で日本人が最も少なく、哀れな貧乏人だ：とまくし立てた。

それノルマだ、シエアだ、進捗率だと、恐怖の妖怪に追いまくられ、セカセカ汲汲の毎日を強いられる。夜もろくに眠られず、自殺者数のみウナギ登り。長い不況で、官庁も会社もリストラ強化。去るも涙、残るも涙。たとえ残つても過労死寸前の強制労働。およそ優雅な文明国にはほど遠い。サラリーマンだけではない。未来の日本を背負つて立つ若者も、過酷な受験戦争・就職競争と針山の雄大な人物など育ちっこない。大自然の中で、山の向こう・海のかなたに、未来を見つめる心のゆとりなくして、英雄は育たない。

そもそも、そんな汲汲セカセカで築いた国家なり会社なりの完成図に、どんな夢やロマンが秘め

られているというの？ 結果は、環境汚染や資源枯渇。持てる者と持たざる者との格差。必ず新たな争いを生じる。永遠のバトルの繰り返し。大脳をいくら膨らまし、どれほどの歴史経験を積もうが、人類の「智慧」は一向に進化しない。聖人の教訓も活かされない。宗教対立は永遠に解けそうもない。結局、人間の本性丸出しで、野生の弱肉強食を、そのままに再現しているだけ。

白人が黄色人種の勃興を憎み「黄禍」と罵り、有色人種を虐げ、人間扱いしなかつた。宗教で「隣人愛」とか唱えても、全くの空念仏。万物の霊長など：チャンチャラおかしい話だ。

時間の束縛。これは最大のストレスだ。しかしストレスで寿命を縮めているはずなのに、日本は世界一の長寿国とはこれいかに？ もしかして、何でも日本に難癖をつけ、対抗意識丸出しのドコカの国が言う通り、戸籍統計がデタラメで、²⁰⁰歳の行方不明者がうようよしているせいなのか？

冗談はともかく、ストレスに追われ、命をすり減らしている事情は、先進各国なら、いづこの国も多分同じ。1760年、イギリスの産業革命以来、近代資本主義経済が成長確立するに従い、効率主義は強く求められた。更に植民地政策が行われた世界各地において、ノルマやシエアが課せられ、自然に流れる悠久の時間を楽しんでいた先住民をも巻き込んで、死のロードレースが始まつた。

イギリスの労働者が一日¹⁰時間労働を勝ち取つたのは1847年で、8時間労働になるのは、もっと後の話(日本の週40時間制は1987年から)。何しろイギリスの初期資本主義を象徴する例として、炭鉱爆発があつた際、労働者が吹き飛ばされ、宙に浮いていた時間は働かなかつたとして、その分を

後で給料から差し引かれたという話がある。

さて、今回のテーマについて議論するに当たり、まず「時間」とは何ぞや。その定義を明確にしておきたい。「時間」には物理的、哲学的、民族的時間などいろいろあるが、ここでは、物理的時間について定義する。

1967年「協定世界時」というものが取り決められ、1秒とは、それまで1平均太陽日から割り出されていたが、地球の自転にも微妙な狂いが多いため、これを廃し、セシウム原子の振動数（詳細略）で定められることになった。これは20万年に1秒しか狂わない。しかし、これはニュートン力学の「絶対時間」に極めて近いものではあるが、真の「物理定数」とは言えない。なぜなら、アインシュタインの相対性理論によれば、相對運動する系では、時間に延び縮みがあるからだ。

1971年、米海軍は、相対性理論の確認実験を行い、2機のジェット機がそれぞれ原子時計を積み込み、地球を東周り（自転方向）と、西周りに飛び、地上の原子時計と比べたら、東周りの方の時間が進んでおり、西周りの方は遅れていたことを確認している。なお重力についても、測定する場所により変わる。地上で60kgの人は、月面では10kgである。ダイエットなど小器の凡庸が騒ぐことで、ナンセンスと、捨ておきなされ！（なお、長さの単位も、フランスのメートル原器は昔の話。今は1 μ とは、光が真空中を、1秒の2億⁹⁹⁷⁹万²⁴⁵⁸分の1の間に進む長さとなっている）。

ま、そんなことはどうでもよいことで、こんなセカセカ汲汲の連続では、人類に明るい未来はない。種として、絶滅間際の断末魔の足掻きさながらである。未来学者は、人類の残り寿命は、あと

1万年がいいところという人もいる。将来、恐らく多細胞生物は殆ど姿を消し、元の黙阿弥で、生き残るのは、単細胞のバクテリアのみ。生命は、原始の振り出しに戻ることもなるだろう。

私は調子こんで、法螺を吹いているのではない。直立二足歩行を始めた人類700万年の歴史の中で、狩猟採集の生活にピリオドを打ち、メソポタミアで、居住地を定め、農耕・畜産を始めたのは今から、1万年前。わずか1万年の間に幾多の文明が興亡したことやら。身近な我が国の例を見ても、群雄割拠の時代など、各地に見られた栄枯盛衰は数限りない。文明の滅亡なんて朝飯前の現象だ。

なお、人類誕生して700万年は、地球誕生⁴⁶億年を²⁴時間に置きかえると、最後のわずか2分前。人類誕生は²³時⁵⁸分なのだそうだ。

幾多の動植物が、先代からバージョンアップして進化を遂げ、繁栄した後、衰退していく。人類とても、その例外であるはずはない。アフリカで、今から30万年前、ネアンデルタール人（旧人）がホモ・エレクトウス（原人）から分岐し、ヨーロッパで繁栄し、今から3万年前、忽然と地上から姿を消した。現生人類より²⁰⁰ccも大脳を膨らましたのに、生き抜く術を開発できずに、滅亡していった。種としての寿命は、²⁷万年であった。我々現生人類ホモ・サピエンス（新人）は、同じホモ・エレクトウスから、ネアンデルタール人に遅れること、¹⁰万年後に枝分かれし誕生したが、兄貴分のネアンデルタール人と同じ種の寿命とするなら、残された我々の寿命は、あと7万年だ。

しかし、今やこの地球上に、⁶⁹億人もの人口がひしめき、押し合いへしあい、自己主張し、己のテリトリーを広げようとしている。野生動物が、

やたらマーケティングして歩く姿とチットモ変わらない。所詮、人間も単純な動物の一種に過ぎない。

文明とは人類生存のために、どの程度繁栄すれば適切なのかは、私は知らない。しかし、むやみやたら物質文明を高度成長させれば、それで住みよく、桃源郷がもたらされるとは、到底思えない。

こんなに地球環境を汚染し、資源枯渇（化石燃料・鉱物・種の多様性・水源など）を招き、経済格差や宗教対立で安全性がぐらついていては、7万年はおろか、1万年さえ危ういという未来学者の言も、真実性を帯びてくる。そんな中で、現代の、特に先進各国は、何を焦って、こんなにも汲汲セカセカを繰り返すのか。一体どれだけ物質文明を繁栄させれば、気が済むのであろうか。

乗り物はスピードを競い、情報は寸時にして全世界を駆け廻る。そして1個人ごとにDNA検査をして、最適の投薬をしようとしている。どこまで、延命すれば気が済むのであろうか。神が与えた人類の細胞分裂回数は、⁴⁰〜⁶⁰回。最大¹²⁰年を寿命とする。それさえ操作したいのであろうか？ 老人が巷に溢れ、若者のいる場所がなくなる。今世界は、少子高齢化の歪な人口ピラミットを示す日本を、「ジャパンシンドローム」と名付け、今後、日本がどのように進展するか、強い関心で見守っているという。そして人類の欲望は果てしもない。資源確保のため、沿岸国でもないのに、北極海の海底に国旗を立て、更に核融合発電の燃料確保のため、地球には無いヘリウム3の鉱区を設定するための月探査機をぶちあげる国もある。重大な酸素供給源の熱帯雨林は、バイオ燃料生産のための焼畑農場と化する。マグロなど、種の存続さえ危ぶまれるまでに乱獲を続ける。

そして悲惨な話だが、今なおアフリカ象は、年繁殖率（6%）よりも、密殺率（8%）の方が高い（主に日本のハンコが元凶。その証拠は、隠して運搬しやすいように、ハンコ大にドリルでくり抜いた後の象牙が現地に捨ててあるのだという）。密猟者は、親子連れを群れから切り離し、まず小象を殺す。すると母親が側を離れないため、簡単に殺せるのだそうだ。こういう人類なら、許容の限界を超え、もう私は、許せない。人類に他の種を滅ぼす権利など微塵もない。人類は決して特別の存在でも、神に近い存在でもない。人間の美しさを讀えた芸術はゴマンとあるが、夢想家が描いた虚像にしか思えない。いっそのこと、極端なパンデミック（世界的大流行病）でも起き、人類は人口を極限まで減らし、一から、やり直すしかない。そして人類はそれぞれの主義主張にこだわり、受け入れない者は敵とみなし、大量破壊兵器を駆使しても、己の主張を押し通そうとする。どれだけ歴史の教訓を積んでも、一向に改善されることはない。救いようのない万物の霊長様である。

* * * * *

話は変わるが、我々が思い及ぶ世代というのは、せいぜい8代までか？ 上3代、下4代。曾祖母、祖父母、両親、自分、子、孫、曾孫（ひまご）、玄孫（やしご）。1代²⁵年として、200年がいいところ。後はわしや知らん。無責任に生存環境を破壊し、後は野となれ山となれでは、あまりにもひど過ぎはしませんか？ 万物の霊長とか言われたいのなら、子孫が安住できる環境をキチンと整え、次世代に譲るのが「叡智」というものであろう。何のために大脳を膨らましたのか。

とは言え地球表面は、どうせ大陸移動の離散集

合は必ずやってくる。その際、造山運動（インド亜大陸がオーストラリア方面からやってきて、アジア大陸に衝突し、ヒマラヤ山脈ができた）や、スーパープルーム（マグマの同時多発大噴出）により、火災・酸欠・有毒ガス噴出・急速凍結・急速温暖化などで、全生物の大量死滅が過去に何度も繰り返している。そしてその都度、生き残った何かの生物が、息を吹き返し、大繁栄を成し遂げる。今から6500万年前、直径10kmの小惑星が中米ユカタン半島に衝突して、全地球上の恐竜は滅びた。そのお陰でネズミ大の哺乳類の元祖が繁栄し、モグラの仲間から、我ら霊長類が勃興し、人類にまで発展を遂げた。地球はそのような歴史を何遍も繰り返してきた。

そして太陽は、あと10億年経つと急速に輝度を増し、地球上に生物は住めなくなるし、23億年後には、我々の天の川銀河は、お隣のアンドロメダ銀河と衝突し、わが太陽系など巨大な星がブラックホールに飲み込まれるかしてしまふ。そして、太陽はもし生き残っても、50億年後には燃料切れで燃え尽き爆発し、宇宙空間にチリとして霧散する。そう考えると国家体制の違いとか国境線など、何の意味がありますか？ 与野党攻防戦？ 借金や貯金は？ そして人間同士の憎愛は？ 何もかにも「井蛙（せいあ）の見」と莊子が嗤う。

そこで本論。ユダヤ教やキリスト教の世界観は、「時間は一直線に進む」不可逆性の直線構造とみなした。一方、古代ギリシャやインドの世界観は、季節の循環や生物の盛衰などから、回帰説をとり、時間は元に戻る「円環構造」であるとした。

現代の西洋文化は、時間は直線的なもの、過去から現在・未来へと一直線に定規で引いたように

流れていくもの、数学的絶対的なもの、ニュートンが『宇宙は時計仕掛けだ！』と言ったように、均一正確で、何物にも影響されることなく、矢のように真っすぐ流れて行くものとしている。絶対的権力を持つローマ教皇は、1582年、グレゴリオ歴を定め世界に強制した。抵抗していたイギリスも1752年にはこれを認め、日本も1873年これに従った。そして七つの海を支配した大英帝国は、地球上の地図に緯度・経度を定め、1852年グリニッジ天文台に親時計を置き「マスタートークロック」と命名し、「グリニッジ標準時」として世界に時報信号を送った。正に『時は権力なり』の始まりである。

そして政治家にして科学者であったアメリカのフランクリンは、1748年、正面切つて『時は金なり』と高らかに言明し、国民に勤勉努力を強要した。このへんから西洋文明は『時間＝貨幣』そのものように硬直化して行ったと言われる。そして、日本も1867年の明治維新以来、西洋に追いつけ追い越せの号令の下、冒頭の妖怪どもに追いまかれる運命となった。

【フランクリンもつまらぬことを言ったもんだ。ある新聞のコラムによると、小津安二郎映画監督は色紙を頼まれると「鯛夢出鳴門円也」（タイム・イズ・ナット・マネー）と書く。意味は、『時は金ならず』＝貴い時間は金銭にかえられぬ。ということらしい。スローライフの徹底こそ人類の滅亡を防ぐ…とする私の主張と、よく一致する】

さて、生物は本来、「体内時計」を持つている。生物時計ともいい、生まれつき具えている時間の測定機構で、概日リズムや光周期性などである。潮の干満、大潮など正確に予知し、サンゴや蟹・魚などの産卵がみられる。女性の生理周期も、敵

肅に自然の摂理に従属している。これが本来の「野生の時計」なのである。この野生の時計を無視して、人が寝ている間に働くなど人工のストレスを蓄積するから、諸々の悲劇が発生する。金と時間の怪物に追いまくられる哀れな生き物。蒼い顔して、のたうちまわる瀕死の生き物。「絶滅危惧種」それは雪豹でもトキでもなく、人類なのだ。これを杞憂と嗤うなかれ！

GDPの伸び率はもういい。年々経済がそんなに発展する必要はもうない。限られた資源の地球上で、何をそんなに発展する必要があるというのだ。経済活動が激しければ、それだけ排気ガスや廃棄物が増え、地球環境は汚染を増すばかり。人間の活動のため、弱い動植物は、沢山犠牲になっっている。その点、スローテンポの発展途上国では、先進国に乱されなければ、野生のままの自然がしっかりと残っている。熱帯滞在経験からつくづくそう思う。ラテンアメリカの人々は、深夜まで歌い踊るため、タップリ昼寝の時間をとり、悠々の時間を心行くまで楽しんでいる。

目を覚ませ！ 健康を取り戻せ！ ゆっくり歩け！ **野生の時間を取り戻せ！** 社会の掟や会社の規則など、最低限度のものは守るとして、もっと奔放に、分刻みのスケジュール手帳は投げ捨てろ！ 無機質にカチカチ刻む西洋式時計は、捨ててしまえ！ もっと伸び伸びと、風の吹くまま、気の向くまま。歌の文句じゃないが、明日を知らねえ旅鳥。繰り返しの利かない人生だ。もう少し、自分の思うがままに生きたいものだ。

世界の至る所でキリスト教は、原住民の野生的な、円環的な丸い時間を、無理やり四角で強情な、直線的な時間に変えてきた。インディアンやアボ

リジニ、アジアでも彼等の信仰する神々を否定破壊し、ゆっくり流れていた彼等の悠久の時間を、無味乾燥な一直線にし、森の神、山の神、海の神、田の神などをナンセンスとして、一蹴した。マヤ文明の白人により破壊された遺跡を訪ねてみて、それがよく分かる。

飼い馴らされた人工の時間よ、おさらば！ 鮭が帰り、熊が冬眠し、コゲラが子育てをする野生の時間を、タップリと堪能したい。泥池に気高く凜と咲く睡蓮をながめ、茸や山ブドウに、たまにありつけたら、大地に感謝し、賢治じゃないが、そういうものに私はなりたい。

盆綱引き

伊東弓子

新開地に住む者にとつて地域での生活が短い。地域の生産活動から生れた日々の営み、人との繋がりが全くといっていいぐらい無い。それが煩わしくなくていい。という風潮が強い。経済的に困っても隣り近所に助けて貰う必要もない。具合が悪くなっても救急車がある、医者がある、噂話しにでもなると厭だから話したくない、興味のあることは気の合う人とした方が楽しい。世界中のことは座っていても解る時代だと逃げています。

自分一人はそれでいいかもしれないが、後に続く子や孫がいる。だから故郷の景色を見、歴史を知り人と語り地域への参加を進んでいかねければならないと思う。故郷の中に壊れかけているものがあるから、見つけ出してまず拾っていきたい。それには参加することだと決めて孫と一緒に

盆綱引きを見て廻り始めてもう十年になる。

最初は園部川が九十九折といわれた程蛇行していた地域で、川中子の鮎内、川端だった。鉤に曲った道を北へ行くと隣の町になる。孫と一緒に盆綱引きに付いて歩き出したのは、周囲が暗くなりかけていた。藁で作った龍は共同墓地に置いてあって、男の子達が迎えに行き、佛をのせて一軒各に「迎えてきました」と届け歩くのだった。一寸前迄は女の子達も浴衣を着て、龍を引く男の子達の後から話をしたり、笑ったりしながら歩いて歩いたが、今は少なくなってしまった。「男っ子らも張り合いがあんめえな」と傍にいたお婆さんが言っていた。誰が龍を作るのか等聞かずに終わったのは残念だった。

次の年は川中子と地続きの浜浴いの地域へ行つた。龍を作る藁が乾してあるのを見た。その家の五十代の主人が龍を作るのを請け負っていること、「これから先覚えてもらおう後継者を育てることも考えていかないと」と心配していた。お盆の日うす明るい時に行つた。泊りに来ていた子供や母親も「懐かしいのよ。だから毎年この日に帰ってくるの」と話してくれた。又八十歳を過ぎたお爺さんの話だと

「子供の頃は子供等沢山いたぞ。龍だつて太くてなんがーく作つてくれた。子供等の声もでつかかった。一軒、一軒、家に入り、畳を叩く音もでつかかった。(ほとけさまもごらした)」と龍に乗っている佛さま(その家の先祖さま)を下す訳だ。(ほとけさま、おりらんしょ)とか部落によって言葉が少し違うのが、これまたいいな」と今の子等への思いも懸けて語ってくれた。

稗倉、平山という地区には次の年に行つた。こ

の地区は広範囲で人家も多い。子供の人数も多く賑やかに行われた。向う場に八木、井関が見える。その地域にも盆綱引きはあるのかな、とおもって耳をすますと声が聞こえてくる様な気もする。長い時間かかっていたが、ついていく私と孫も暗の中に溶け込んでいた。小さな灯りと子供等の動きの中で幻想的な世界を感じ、幸せであることを味わっていた。地区の外れにある神道の家には寄らず、Uターンして左の道に入っていた。のんびりした時の流れの中で、どうか子供等のこの時間を大人達が壊すことのないようにと願いたい。

次の年は橋下り、田畑という地域に行った。上玉里との境に面している。ここは何か華やいだ雰囲気を感じた。子供の数が少なくなつて女の子達も参加していた。赤い浴衣が盆の宵に色を染め、静けさの中に女の子独特の音が暗の中に響いていた。子供会が主催となり若い親の姿が目についた。地域の行事も続いている人達の知恵で変わっていくのを感じた。

次の年は根玉里地区へ行った。広い地域に家が疎らにあるというせいもかどこか他と違った。トラックに龍と子供等に乗せ一軒づつ下ろして行っていた。これには驚いたし、後を追うのは無理なので諦めた。大人達の都合か、時代の影響か、子供達の自主性や心はどうなるのかな、大人は影になつて見守れないのかな、自分達の住んでいる地域で年に一、二度の夜の催しを安全を信じて行う工夫はないのかとあれこれ思いながら帰った。蛍も飛ばなくなつた時代だからという恨み言は胸におさめ、開山上人の墓地(良善山)に孫三人と何十本というお線香をあげた。この灯の一つ一つが昔の人への感謝のおもいのように暗の中にお盆の花

が咲いた宵だった。その後ある母親との話に

「いとうさん、なんとか言ってもらえませんか、車で走るんじやなくて、子供達に歩かせた方がいいと役員さんに言ってくださいよ」

との事だった。直接ではなく機会をみつけて話しが出来るようにしたいと思うが、若い人達では考えられないのかな。

火の橋、城の内地区や須賀地区、高崎地区、高浜などの川沿いでは行われていなかった。もともとなかったのか、途中で消滅したのか解らない。

栗又四ヶの辻、小川地区、根本地区などでは行われていけると聞く、年に一度の行事だし、私も先も短くなつてきた、早めに確かめておこうと思う。

ここ三、四年前から自宅での迎え火も行う役目が自分にまわつてきた。孫たちも大きくなつた今、妹の孫たちと東田中の盆綱づくりを見に行っている。田を挟んで東と北の二つの部落に分かれてそれぞれが老人、親、孫達がじっくりと盆綱づくりをしている。今まで見て来た地区の盆綱づくりもこのように丁寧に行われていたのか、どうかとあらためて思い出される。

東の地区は不動様の境内で老人(男のみ)親(父母交り)子供(男女)の参加だった。老人が父親達に指導して龍を作る。材料は杉の若木、杉の葉、縄、竹、茄子が用意されている。子供達は大人の周りで遊んだりみたりしているが終わると掃きそいうじし散らばつた物、残りのもの燃やしていく。一人の父親が時々シャッターを押し、最後は皆で写真を撮る。子供達は出来上がった龍を共同墓地へ置いてくる。夕方の集まる時間を確認しておやつにした。私達も頂いたりして会話もはずむ。

工房オカリナアートJOY

母なる大地の音を自分の手で紡ぎ出してみませんか。

あなたの家の庭の土で・・・、また大好きな雑木林に一摘みの土を分けてもらい、自分の風の声を「ふるさとの風景」に唄ってみませんか。オカリナの製作・オカリナ演奏に興味をお持ちの方、連絡をお待ちしています。

野口喜広 行方市浜2465
Tel0299-55-4411

ギター文化館

2011 CONCERT SERIES

- 3月 6日(日)白井啓治・野口善広の朗読とオカリナコンサート
- 3月13日(日)啼鳴タンゴトリオ(A.R.C.)コンサート
- 3月20日(日)鈴木大介 ギターリサイタル
- 3月27日(日)パパサラ フォルクローレコンサート
- 4月10日(日)小原聖子モデルコンサート&マスタークラス・ワルッスン
- 4月24日(日)荘村清志ギターリサイタル

ギター文化館 〒315-0124 茨城県石岡市柴間 431-35
☎ 0299-46-2457 Fax 0299-46-2628

北地区の人達は村外れの石佛のある木の下集まっている。このメンバーは老人も親も子も男のみだ。材料は東地区と同じ物だ。老人が主になって作り、親達が手伝って行く。子供達は周りで見ている。静かな雰囲気が進められていく。この地区は家並みの後に山を背負っているの、小高い所にある共同墓地へ龍を運んでいく。その後は掃除する子と山の裏に砂とりに行く子と分れて作業する。大人達は道具の片付けをしていく。砂とりに行った子供達が帰ってくると挨拶をして解散していく、子供達だけで各家の入口角に、砂の小さな山を作っていく、夕方ここに線香をたてて龍にのってくる先祖を迎える目印にするという事だった。子供の人数が足りない事は中学生(男)の応援もあるという。こうして毎年繰り返される。地域で子供から老人が懸わって行いう事が、続けられていく。この事が子供を育て、守り、よい地域を作っていくのだと今年の正月は熟思った。

この頃の盆綱引きは熱かろう、大変だねと飲み物を呉れるそうだ。缶がいくつにもなる。盆綱を引くところではない為、リュックを背負って歩くという、以前は子供達へのお駄賃としてお金を頂く事ので、お金を入れる袋を持った子が一人役目としてあつて、盆綱引きのリーダーでもあつたそうだ。

壊していくのは大半、いや殆ど大人の勝手、都合が多い、よく考えていく必要がある。

盆綱引きが終わると地区境の寺跡に龍を置いてくるのだ。毎年二匹の龍は役目をおえて横たわっているが、やがて草が茂り土と同化していく。汚れも護美も残らず土となる。

今年の盆綱作りにはなあちゃんを連れて見に来

よう。孫の住む地域にないものを、間接的に感じたいってもらうことが、私の役目とおもうからは非来よう。

平成遷都一三〇〇年 正倉院展 兼平ちえこ

正倉院展は、古来から行われた曝涼(虫干し)の伝統により、毎年秋のみ開封され、この期間に合わせ毎回約70件の宝物が出陳されるそうである。

正倉院宝庫は東を正面とした南北に長い建物で、内部は北倉、中倉、南倉の三部屋に分かれていて、北と南倉は校倉造り、中倉は断面が長方形の板を積み上げて壁とした板倉造り、湿気を避ける為の高床式宝庫である。近年行われた年輪年代測定調査(木の成長の痕跡が年輪として残されており、その数から伐採された年代を知る方法)によつて、奈良時代中期に建立され、聖武天皇が亡くなった天平勝宝八歳(七五〇)には完成していたことが明らかになった。

宝庫には、聖武天皇が亡くなって四十九日目(五六年六月二十一日)に、光明皇后が天皇の遺愛品を東大寺大仏に献納したことが始まりで、その他皇族、貴族達が大仏に献納した刀子や帯、数珠、ガラス器、銀器等。東大寺法要で用いられた仏具類、楽器等。宮中の年中行事で用いられた道具類のほか、武器、武具、文房具、遊戯具、飲食器、文書等、これに加えてペルシャ、中国の唐、朝鮮半島の新羅等同時期のアジア諸国からもたらされた品も含まれて、約九千件の宝物が伝わっているそうである。

正倉院宝物が初めて一般に公開されたのは江戸

時代の事であるが、昭和二十一年(一九四六)に始まり奈良国立博物館での開催は今年で六二回目、東京国立博物館での開催の三回を含めれば六五回目の開催になるという。

展示会場には早めにと、七時半に到着したときは、九時開館にもかかわらず、すでに十五人位列を成している、見る間に長蛇の列。関心の深さに驚きであった。いよいよ入場になると寄せる波のように人の海：勿論、皆さんは、今回十九年振りにお目見えの聖武天皇御遺愛で世界唯一の古代五弦琵琶として名高い螺鈿紫檀五絃琵琶(らでんたんごげんびわ)を目指している。会場の真ん中にケースに入つて一段高い位置での展示であった。また列を成している、真近に見られた頃には十五分位経っていた。

五弦琵琶はインドに起こり中央アジアから中国に入つて唐時代に流行。弦を張つた正面にはラクダの上で琵琶を弾く人や熱帯の木、鳥、花文。背面には咲き誇る唐花文等を輪のように繋げて細かに表して、文様には貝を使った螺鈿やウミガメの甲羅、コハクなどを用いて美しく飾っていた。音声ガイドから聞こえてくる天平の琵琶の音色は簡素で優しさと上品さにあふれていた。

次は種々薬帳。七五六年六月二一日、聖武天皇四十九日法要に大仏に納めた薬六〇種の名前や数量と重さ、容器などかいた薬の目録である。巻末には光明皇后の願文が記してある。『病に苦しむ人々のために、これらの薬を實際に用いるようにと述べ、この薬を服せば、万病ごとごとく除かれ、命終つた後は盧舎那仏が住む蓮華蔵世界へ往生できるよように』と願っている。願いどおり、献納か

ら間もない十月三日に人参五十斤が施薬院(貧しい病人に施薬、施療した施設。天平二年光明皇后創設)へ支給されたのはじめとして、これらの薬物は実用されたそうである。そのほか、五色龍齒(チウマン象の下あごの歯の化石鎮静、鎮痛に効能)、大黃、冶葛など展示されていた。

又今回は工匠と呼ぶ細工や工作を職業とした人糞使った道具が多く出陳され、(木材の表面を削って平にする、刀子(今の小刀で木簡を削って白面にし、何度も使えるようにする)、鑽(きり)、多賀禰(金属を彫刻したり皮を切ったりする)、これらは金属部分がすり減っていることから実際使われていたことがわかる。豪華な宝物の多い中、地味ながら、現代にも通じるものを見ると、天平人が身近に感じられた。

その他、宝庫最大の鏡、初公開の鳥獣花背八角鏡、白銅で出来た厚手の鏡で、この鏡と同型の鏡が千葉県の香取神宮に伝わっているという。

シルクロードの香りが感じられる漆胡樽(木製容器の水入れ)、遣唐使らによつてわが国にもたらされたものと思われる、称徳天皇が東大寺行幸の際に献納された銀壺、胡人(ベルシャなど西域諸國)の王の顔を表した伎楽面・酔胡王、などなど国際色豊かな華やかな天平の時代を目にして、一三〇〇年前のものとは思えない、当時の美しさを保っている宝物に驚嘆し、そして海外の文化を積極的に取り入れた奈良時代を懸命に生きた天平人から豊かな心を頂いた。

最後に、奈良時代の社会生活を伝える古文書類の中の「正倉院古文書正集 第七卷」の法師道鏡の、自筆文書に食い入る。

この法師道鏡については次回とします。

参考資料 第六十二回 正倉院展

・海原に梢 春の乱舞い
・にぎやかに水仙 春蕾んでる ちえこ

縄文の森コンサート 小林幸枝

2月6日、美浦村の文化財センターで、陸平をヨイシヨする会のお招きで、ことば座の公演をさせていただきました。

昨年の6月公演の時に、ヨイシヨする会の会長で、美浦村の劇団「宙の会」を主宰しておられる市川さんが、会の方5、6名をお連れになつて、招へいのための見学にいらしていただき、公演が決まったのでした。その時に一緒にいらした中に柏木久美子さんというモダンダンスの方がおられ、可能なら一緒にコラボレーションしてみたいとお話を頂きました。

そのことを白井先生から聞いた時にはびっくりしたのと同時に新しいチャレンジが出来ることに大変うれしく思いました。

8月に最初の打ち合わせを行ったのですが、具体的によどのような形でのコラボレーションになるのか心配でしたが、私が、プロのダンサーと一緒に舞台上に立てることの嬉しさでいっぱいでした。柏木さんとは、1月に入ってから一緒に稽古を何度かさせていただき、稽古のたびに新しい舞のアイデアを聞かされびっくりしました。先生からは、モダンダンスだから、形にとらわれた舞ではなく、台本にあるテーマとそれに向けて自分はどう表現したいというものを確り気持ちの中につくり、心の揺れのような形で舞表現を出してくる

と思いますよ、と聞かされていましたが、本当に私とは全く違ったプロセスで舞の表現を構築されてきました。

公演は、第一部が一行文詩を中心とした朗読舞、二部が「縄文の舞い」という朗読舞劇、三部が野口さんのオカリナコンサートでした。

第一部の朗読舞では、手話を舞にしたものが理解していただける心配でしたが、終了後、手話が舞になるとは思ってもいなかったし、舞にする手話がとつても理解しやすいと言われ、とても嬉しく思いました。

第二部の朗読舞劇では、柏木さんの舞、私の舞がそれぞれ独立してあり、最後に二人で一緒に舞いました。朗読を舞いにするのは、私のように手話をベースとして考えれば、イメージしやすいのですが、柏木さんの舞ではどのようにイメージするのかと思っておりました。白井先生から、柏木さんは言葉で舞にするのではなく、言葉の持っている音の響きを感じながらその響きの中にある心を風のように吹かせていく、と難解な説明を受けていましたが、舞台上立つまでは意味不明でした。

私の舞は、台本に書かれている詩を、手話に訳すのではなく、文章に表現されている心を動作という手話語に翻訳する形で構築していきます。一緒に舞ってみて、柏木さんの舞も説明の舞でなく、詩を柏木さんの舞語に翻訳していると感じ、ものすごく共通していると思いました。

初めてお会いしたとき、おばさんの感じを持ったのですが、舞になるとおばさんなんて失礼なことを言えません。若々しく大きく、優しい風になつて観客を圧倒します。とても素晴らしい体験をさせていただきました。

白井先生から、日程はまだ確定できないけれど今度はギター文化館での定期公演で、コラボレーションしますからねと聞かされ、早く実現できることを楽しみにしています。

陸平をヨイショする会の皆様には、大変お世話になりました。温かい声援をたくさん頂けました。今度は、縄文の森で皆さんと一緒に舞う事が出来たらと願っています。

【特別企画】

虚構と真実の谷間

打田昇三

第一章 文字と歴史(前篇)

或る著名な哲学の先生が従来の自説を根本から訂正する作品を発表されたと新聞の文化欄に大きく載っていた。内容は「大和民族」と勝手に称して日本を支配している怪しい連中よりも一足早く日本へ来ていた須佐之男命(すさのおのみこと)系出雲族のことである。島根地方を回り出雲文化圏を再認識された。その結果を改めて書き直されたのだが、現在のご年齢が八十五歳で九十歳までの著述予定が詰まっております、その先の仕事には百二十歳が必要というお話には驚嘆するほかない。近頃は自分が何をしているのか分からない政治家や、自分が誰だか分からなくなっている人も少なくない。普通に暮らしていても昨日のことは細かく思い出せないのに何百年も何千年も昔のことを丹念に調べて「出来事」を掘り出すのは至難の

業であろう。それを承知であらゆる史料を読み解き遺跡などを調べ、其処に隠された真実らしきものを探究されるのだから大変である。

偉大な先生になぞらえるのは畏れ多いが、好奇心だけで昔の一隅を覗いている私など、大先生の御苦労を拝察すると「どうせ、歴史は嘘が多いのだから其の俛にして置けば…」と思ったりもしてしまう。そういう根性だから歴史を探るのも俗説任せで、面倒になると過去の出来事を現代に置き換えてしまうから真実など把握できる筈も無い。「そうだ!」と思つた説を鵜呑みにして納得する。

しかし、最小限の自分の信念として、どの時代でも美辞麗句で飾られた当時の権力者への賛辞だけは信用しないことにしていた。ところが大部分の歴史は権力者が作らせ権力者に都合良く出来ているらしく「さり気のない嘘」が上手に組み込まれているようなので結局は騙されることになる。

出雲の歴史を書き直された大先生も、藤原不比等によって「日本建国時代」の神話が改竄(かいざん)「されたことを指摘しておられる。

日本には大昔から八百萬(よおよろず)の神様がおわしますとか、神様は何でもお見通しで悪い奴に罰を与えても、何も語られないから建国に関わる日本の古代を知りようが無い。そこで中途半端に権力を持った輩(やから)が自分に都合の良い歴史を捏造(でっちあげ)したのであろう。

海の向こうの中国大陸には多くの国々が興亡していたけれども、紀元前千五百年頃に興った黄河流域の「殷(いん)」が、動物の骨を焼いて占いをする際に刻み付けた「甲骨文字」を残していた。国家の体質が変わってしまった近代はどうか知らないが、昔の中国の人は歴史を大切にしようで、

王朝が滅亡しても次の王朝が先王朝の記録を残してくれていると言われる。支配者は変わっても王権の継承意識があったのかも知れない。

尤も甲骨文字が文字として陽の目を見るようになったのは清国(しんこく)の末期時代、日本の明治後期らしい。それまでは漢方薬として市場に出回っていた動物の骨でしかなかった。持病を持つ学者が通信販売の広告を見て取り寄せた薬材に古代文字が彫りつけてあったから大騒ぎになり中国建国草創期の歴史が明らかになったのである。文字の始まりは粗末にされても漢方薬から抽出し加工した「漢字」が紀元前から出来ていたから、伝承された王朝の記録と相俟って中国の古代国家史は実に明細に現在まで伝えられている。

「歴史はシュメールに始まる」と言われるが、中国の古代文明よりもさらに二千年ほど古い世界最古のオリエント文明では、メソポタミア南部に興つたシュメールの初期都市国家ウルク期に、絵文字から始まって楔形文字に発展した方法で粘土板に日常のことを記録することが行われていた。ウルク期の前のウバイド期には、作物の管理や交易の為の記号が必要になり「トークン」と呼ばれるビスケットのようにして線を刻んだ粘土板や、絵文字の封印「スタンプ印章」などが文字代わりで使用されていたようである。

やがてシュメール人は楔形文字を作り出して多くのことを粘土板に記録した。粘土板文書はメソポタミア文明の各地遺跡から多量に出土し、それらはペルシア語やアッカド語(シュメールの後にメソポタミア全土を支配した王朝の言語)で書かれているとされてきた。ペルシア語は古代・中世・近代の区別はあるが共通性が有つたよう楔形文

字で書かれた粘土板文書は西暦一八〇〇年代から解読が進められていた。近年には初期に粘土板文字を使用していたシュメール人とシュメール語の存在も注目されているようである。

シュメール語を分類すると日本語、モンゴル語、トルコ語、朝鮮語などと同じだと言われる。それなのに片やシュメールでは四千五百年も昔から立派な文字で全てのが記録されていたが、古代の日本や、古代日本を乗っ取った大陸系王朝には確な文字が無く、それを良いことにして国の歴史を改竄し、権力者が都合の良い嘘の歴史を作り上げた。そして近年まで、いや近年でも「神様の子孫が統治する萬世一系の国だ」などと寝言を国民に信じさせている。この差は何なのであるうか：

観光で知られる古代エジプトのヒエログリフ（神聖文字）も、シュメールとほぼ同じ頃に出ていたと言われる。ただし、ヒエログリフはエジプト王国時代の特権階層である書記が使っていた文字であり、王朝が崩壊してからエジプト人はもとより、読める者が世界中に誰も居なくなつた。この文字はメソポタミアの文字に影響を受けたとする説とエジプト独自に出来たとする説がある。古代エジプトの遺跡からは絵文字で書かれた出土品が續々と発見されたが誰も読めない。

エジプトの古代文字には、もう一つヒエログリフの草書体とも言ふべきデモティックがあった。歴史の父と称されるヘロドトスにより「民衆文字」と訳されているから日本の「ひらがな」のようなものだと思つていたので違つていた。横着な昔の書記が書くことを面倒がつて言葉や記録内容を表音的に略して記録したもののようで、ついには一文字ずつヒエログリフに変換出来ないようにな

り、ローマ時代頃からは消えていたらしい。

神様からは「異国のことなど、どうでも良い…」と怒られそうだが、日本の歴史も古墳時代辺りからは異国人に取つて代わられたようなので、以下は古代を証明する「文字」に関する全般の話として横道に逸れることになるけれども「容赦を：

国家としてのエジプトは王朝時代の後、紀元前三百年代にアレキサンダーの支配を受け、引き続き「ディアドコイ（アレキサンダーの後継者）」の一人であるプトレマイオスが支配し王朝を建てていた。ギリシア人の王朝であるから、使われたのはギリシア語である——と言うよりも、プトレマイオス王朝の王様はギリシア語しか話せなかつた。国民はエジプト人である。通訳は忙しかつたらしいが王の命令で神官団が出す布告は、①ヒエログリフ ②デモティック ③ギリシア語 の三種類にして右に刻んだようである。その一枚がナイル河川の都市サイスに在つたオシリス神殿の境内にも立てられていた。紀元前一九六六年に、皇帝プトレマイオス五世が自分の業績を讃える行事を行うことを布告した文らしいから内容はつまらない。

やがてエジプト王国は美人女王のクレオパトラ七世がローマ軍人のシーザーやアントニウスと恋愛物語を展開し、紀元前三〇年頃に滅びた。ローマ帝国、ビザンチン帝国の支配を経て西暦六〇〇年代の半ば頃にはアラビアの砂漠地帯に興つたイスラム勢力（サラセン帝国）がエジプトを占領していた。キリスト教徒の抵抗もあつたためイスラム軍は砦を築くことになり、古代から存在していたエジプト神殿などは「工事資材」としか見られずに、プトレマイオス王朝の王様が建てた記念碑も例外では無く砦の石垣にエコ活用されていた。

七世紀から凡そ九百年ほどイスラム系の王朝に支配されていたエジプトは、西暦一五〇〇年代の初期にオスマン・トルコの領土に組み込まれた。そのエジプトに西暦一七九八年五月、ナポレオン一世の率いるフランス軍がやつて来た。別に招待をした訳では無いが、オスマン帝国の弱体化に付け込んでエジプトを狙うイギリスを牽制する目的で陸軍三八〇〇〇、水兵一六〇〇〇が三五〇隻の軍艦で来たと言うから遊びや冗談ではない。

ナイル河口のアレキサンドリア市近郊に上陸してから、先ずイギリス軍などの抵抗を予想して防衛陣地を構築することになり、イスラム軍が建てていた砦を壊して工事の材料にした。その作業中にロゼッタの現場で工兵隊が奇妙な文字の彫られた石を見つけたのである。それが現在は大英博物館の至宝とされる「ロゼッタストーン」なのだが「我が辞書に不可能は無い」と威張つたナポレオンも碑文は読めない。他の者も同様である。

ナポレオンという男は、貴重な遺跡のスフィンクスを射撃の標的にしたり、徴兵制を施行したり、各地に侵略をしたりして評判は良く無いが、缶詰を考えたこととロゼッタストーンの発見は褒められるようで、エジプト遠征にも一八七名の学者を同行させていたらしい。やがて改革者モハメド・アリがエジプト独立運動を展開する。その糸口を付けたのもナポレオンであるとされている。

伝染病対策や灌漑工事など近代化の施策も検討したらしいが、侵略者にはないからエジプトの民衆が背き、オスマン・トルコ、イギリスなどが兵を出してフランス軍と戦つた。ナポレオンは砲兵将校の出身なので大砲を重視して始めてうちは勝つていた。そのうちにエジプトの神様も

怒って各地に反乱を起こさせ、ヨーロッパではイギリス、スペイン、オーストリア、プロイセン（ドイツ）に反仏同盟を結ばせたからナポレオンも帰国せざるを得なくなった。後半は無理な戦闘が続いて多くの兵を失ったナポレオンは逃げるように帰国した。折角、見つけた貴重な石碑も他の出土品と共にイギリスに持っていかれたのである。

ロゼッタストーンを手に入れたイギリスでも、これを読み解ける学者は居らず「宝の持ち腐れ」になっていった。結局、苦心の末にこれを解読したのはシャンポリオンと言うフランスのエジプト学者である。この人は大のナポレオン嫌いであったと言うから世の中は面白い。

エジプトの出土品がナポレオンとかシャンポリオンとか、洗髪用品のコマーシャルのような名前の人物を苦勞させたのはヒエログリフ（絵文字）がエジプト独自の文字であった所為である。ところが、実はエジプトの或る時期には当時の国際語であるアッカド語（アッカド語で書かれた楔形文字）が通用した時期があった。これは推定に過ぎないが、かのツタンカーメン王もアッカド語（文字）を知っていた可能性がある。

ツタンカーメンはエジプト第十八王朝第十一代の少年王であるが、通常ならば国王になれる人物では無かった。先代のアメンヘテプ四世に男児が無く、三人居た王女のうち次女は早死にし、長女の婿が次の王になる予定であったが三年で死亡している。残った三女に迎えた婿がツタンカーメンであり、その素性ははっきりしていない。

国王とは名ばかりで、初めのうちはエジプト王朝ナンバーワンの美女・義母のネフェルティティが後見し、後半は腹黒い摂政のアイが政権を牛耳

っていた。黄金の仮面は、どの王様でもミイラになれば被るのだが窃盗団が根こそぎ頂くことになっていた。ツタンカーメンは全く無名の王で名簿からも削られ、墓は王様用では無くて、その上部に墓地管理事務所が建てられていたという偶然が重なって仮面ごと無傷で発見されたに過ぎない。

アメンヘテプ四世は、古都に巢食う神官団に對抗するため「アマルナ革命」を起こして都をテーベ（現在の観光名所であるルクソール）からナイル河下流域のアマルナに遷した。その時代にメソポタミアの諸国と国際交流を行い、交易を盛んにして多くの外交文書を交換している。それらの文書は粘土板にアッカド語で書かれていた。美女ネフェルティティ王妃も国際結婚で遙々とミタンニ王国からアメンヘテプ三世に嫁いで来た。しかしエジプトに着く前に高齢の婿さんが死んでいたのでも葬式と結婚式を一緒に済ませ、嘘のように都合良く、生きていた次の王の正妃になった。式場の経費を幾ら節約出来たかは知らない。ミタンニ国はユーフラティス河上流地域のシリア、トルコ東部辺りに栄えていた国である。このように文字さえあれば、面倒な国際交流も可能なのである。

そもそも「文明」の条件には「文字の発明」が含まれるらしいから、残念ながら文字が無かった日本の古代は「文明国」と言えないのだが、国の紀元を記録することも出来なかったのに昭和二十年迄の歴史教育では「神様の子孫が統治した万世一系の国」などと嘘を国民に押し付けていた。

これは神様に対しても失礼な行為である。そして「民主主義」と言われる現代でも、その痕跡が尾を引いていて、昔の嘘を疑う人が少ないのは「虚げられた民」の後遺症であろうか：

国家権力の盛衰よりも、国民がどの様に暮らしてきたのかを伝えるのが歴史の本来のような気がするが社会構造上、それが無理ならば、せめて昔のことは正しく伝えて貰いたい。例えば昭和の日本史教育では、神武天皇の即位を西暦紀元前六六〇年一月一日としていた。これを旧暦に直すと二月十一日であるという粗末な設定で紀元節を定めそれが嘘だと分かった現在でも「建国記念の日」を二月十一日にしている。

神武天皇には実在の疑問と行動の謎しか無いから付き合いたくないのだが、百歩譲って五、六世紀頃に西方から奈良盆地に侵入した勢力があり、武力で近隣諸部族を従え、誰かが小王国を経営したことは事実らしい。それが九州の豪族だったのか出雲族の親戚なのか、或いは違う部族なのか…。その親分の名前が「神武」「崇神」「応神」の何れだったのか、千数百年に亘り「神様の子孫」で誤魔化し通してきたから確かめようが無い。仮に、その時を以て「建国」のスタートに設定したとしても実際には西暦四、五百年代のことになるようであり、千年以上昔の紀元前六六〇年には「ヤマタイ国」も「ヤマシイ政治家国」も「政治献金ヤミ取引国」も日本に無かった筈である。

太古の日本列島は「縄文時代」であり人々は自然豊かな大地で穏やかな暮らしをしていた。椎の実、栗の実、栃の実など、食材の数一七五種類と記録した研究書があった。稲作も南と北に同時に伝わったと言うから握り飯を食べたかも知れず、海の幸、山の幸で、とにかく平和に暮らしていたのである。そういうところへ、多分、戦乱が続いていたと思われる中国大陸や朝鮮半島からの避難民が新天地を求め日本列島へ渡って来た。潮加減

で漂着した民族の存在も考えられる。最初はその連中も日本海沿岸や九州近海の島々などに住み着いていたのである。少しづつ日本本土にも侵入してきた。中国の文字が使われていたかも知れないがそれ程普及はしていなかった。記録は残さなかったけれども、島々や沿岸部では伝承の形で冗談のような具体的な神話を持っていた。

草創期・日本の実態は「漢書」「三国志」「後漢書」「魏志倭人伝」「隋書」「唐書」「宋書」など、中国の史書に断片的に書かれている記事から推定するしかないらしいのだが、問題は其処に書かれている日本側の受け皿と言うか王国又は王朝の姿が是まで伝えられてきたことと全く違う―全ては嘘だと判明したことである。その原因は「神代以来の大和朝廷万世一系説」のように、神話の世界と人間の世界を一緒にした幼稚な話を国民に押し付けていた所為であり、それは完全に崩れた。

日本国の歴史は出発点が全て灰色に変わったため支離滅裂にならざるを得ず、昭和二十年以降は、歴史学者を始め、日本史に疑問を抱かれた多くの方々、あらゆる角度から古代史の解明に尽力され新しい説が唱えられている。私の存じ上げる医学博士も、北陸地方のある都市で医師会長をされながら古墳時代を中心に日本王朝の成立を「日本誕生」という本にして出版された。その序文で「日本の古代史学者は、素人の建設的な提言に対し“記紀に書いてない”と言う理由でこれを蹴つたのだが、記紀の記録は捏造されている…従って、文部（科学）省の管轄下にある学者などでは無く（自由に発想できる）官庁に無関係な人や素人によってこそ、初めて日本古代史が解明できる…」とする趣旨のことを書いておられる。

確かにその通りかも知れず、図書館にあるユニークな視点で書かれた歴史書を見ると、著者は歴史学者ではないものが多い。文学者、法学者、美術学者、理学者などであり、作家では研究熱心な松本清張先生の名が挙げられる。「九州王朝説」を提唱しておられる古田史学会の古田武彦先生は思想史を学ばれたようである。この史学会は「既存の説による大和朝廷の日本支配」を根底から否定するので学界に大きな波紋を投じているが会員に東大名誉教授が居られるほど大きな組織である。

国家としての日本には草創期に当る二、三世紀頃になって、渡来系の民族が各地に部族社会を形成するようになり卑弥呼でお馴染みの邪馬台国などがチラリと顔を覗かせたが、これも実際にはたいた国ではなかったらしい。中国の史書に百余国と書かれたほど小規模経営の国が出来て、潰し合いの果てに吉備国、越の国、大和の国など幾つかの中規模な国が現れた。そして平成の市町村合併を先取りしたような国の統合で「出雲」「九州」そして「近畿大和」に統一王朝が出現した。

この三王朝は「一致協力して国民の為に良い政治をしよう」などとは夢にも思わず、現代の政党と同じで相手を蹴落とし、勢力を張り合って日本全土を支配するまで頑張った。その時代が古墳時代の終る頃から飛鳥、白鳳辺りにかけてなのである。九州王朝説に依れば、古事記に至る神統譜の模倣が「出雲王朝」↓「九州王朝」↓「近畿天皇家」の順に行われたそうなので、日本の国家としての統一もその順序に行われたことになる。

文字に縁の薄かったこの国も、先住民が追い出され、同じ民族である朝鮮半島との交流が活発になり少しずつ文字（漢字）が普及した。その年

代は行田市の稲荷山古墳から出土した鉄剣の銘が西暦四百年代後半から五百年代初期と推定されているようなので多分、その頃なのであろうか：中国大陸とのつながりも出来て、仏教伝来の頃には日本列島の住民は何処の馬の骨かも分からぬ漢字を使う他所者の民族に支配されるようになった。

本来ならば是を以て「日本建国の初め」とすべき縄文時代の純粋な民族による日本国草創史や各地に存在した小さな国々の歴史などは、残念だがその時点で闇の彼方へ捨てられたか、或いは渡来系民族の歴史に吸収させられたかである。

引き続き九州王朝説に依らせて頂けば、日本列島で最初に出来たのは大国主命神話を信ずる民族が建てた「出雲王朝」であるとか、出雲国風土記には人間の住む郷（さと）が六十一しか無いのに神社が三九〇社と記録されているから確かに神話の国である。代表的な神話の「国引き物語」は荒唐無稽と言ってしまうえば其れまでだが、国の成り立ちに示唆を与えてくれている。

八雲立つ（多くの小国から成り立っていた）出雲の国の初めはごく狭い国土であった。そこで神様は「もう少し大きな国にしよう」と考え、どこか空き地は無いか、不動産屋に相談したところ、「新羅（しらぎ）に出ものがあります」と言った。

それを買い求めてはみたが、海に向こうでは利用価値が下がるので、これを持ってくることにして何艘かの大きな船で引いてきた。その他、場所は不明だが北門の良波（きたどのよなみ）、高志の都々（このつつ）などと言う土地も運んできてある程度の国が出来上がった。その時代に巨大なブルドーザーや超大型ダンプカーが有ったという話は聞かないから、これは早くから出雲へ来てい

た部族に、新羅などから呼び寄せた部族を合わせて「出雲王国」を形成したことを示すのであろう。

純粋な嘘で出来た出雲の国造りと前後して渡来系民族による九州王国の建国が始まった。この国こそ天照大神こと海女族が居た漁業の島や多禰国と呼ばれた種子島、海幸彦・山幸彦の神話、つまり竜宮城のモデルにも擬される対馬、そして天の岩戸らしき場所がある沖の島等々、朝鮮半島及び中国大陸と日本列島との間にある島々に渡って居た民族が、九州へ上陸して建てた国である。

西海道に属する九州の地は筑紫、肥（火）、豊日向、大隅、薩摩、対馬、杵岐に大別され、筑紫と肥（火）と豊はさらに前後に分けられていた。筑前、筑後、肥前、肥後、豊前、豊後である。列島から九州本土にきた部族は筑紫を起点として徐々に九州一円を支配し九州王朝を興した。そして勢力を東へ伸ばしてきたのである。東の果ては常陸国、この地は縄文人の楽園であったが、各王朝こと大陸系弥生人に完全占領された。そこから先は東北地方、賊として故郷を追われた縄文人たちが辛うじて踏み止まっている土地であった。

筑紫の王朝、つまり九州王朝が支配する領域には渡来した部族別による小王朝も存在したと思われる。特に近畿地方は土着の神々を信仰する部族が幾つかに分かれて居た。それらを三輪山付近に居た部族の長が統括して「近畿大和王朝」を建てていた。九州王朝は、その王朝を支配下に置き、さらに出雲王朝をも併合したのであろう。

つまり全てが九州に吸収（駄洒落では無く）され「九州王朝」が日本統一の頂点に立った―その際に有力だった出雲王国のお伽断だけは政権と引き換えに九州王朝に残された。歴史の浅い近畿大

和王朝には碌な伝承も無かったか、或いは王朝内の権力争いで消されたかである。後に「歴史の無い淋しさ」を実感した大和朝廷が、九州王朝と出雲王朝の昔話を丸ごと利用して自分たちの歴史にしたと言ふことらしく、神話には一貫性がない。

九州に統一王朝があつて日本を支配していた―とする「九州王朝説」には一部に否定する意見もあるようだが、そのことに結びつく幾つかのことが私たちの身近にも見受けられる。先ず、郷土の古代を記録した「常陸国風土記」に九州王朝を思わせる明確な記事が残されている。常陸国風土記は野心の塊のような藤原不比等の意図に添って息子の宇合（うまかい）が編纂したとされている。大和朝廷は九州王朝の歴史を自分たちの歴史にすり替えたのであるから、その痕跡は消さなければならなかったのであるが：これは後で述べる理由から藤原宇合が見落としたらしく、残っている。

常陸国征服の為に九州王朝から派遣されてきたのは建借間命という武将であり、古代から石器を作る道具になる黒曜石の交易ルートが有ったと思われる東山道経由で筑波山の西側を進み笠間辺りから那珂川沿岸に定着したようである。常陸国内を涸沼南岸から鹿島灘に沿って開発し、舟で内海を横断して現在の稲敷市辺り（霞が浦南岸）に上陸した。このコースだと行方台地が抜け落ちる。

西には筑波山が見えるから、其の俣で西進しても良いのだが、抜け落ちる部分があるから北東の空を見上げた。霞が浦対岸の潮来方面を観察することになる。その時に建借間命は怪しい煙を発見して「あの煙が味方ならば此方に向かい、敵のものなれば海中にたなびけ：」と天に祈った。煙は見る見る海の上に広がったので、直ちに海を

渡って潮来に上陸した。その地には夜尺斯・夜筑斯（やさかし・やつくし）と言ふ賊が居て砦を築き堀を深くしていた。建借間命はこれを攻めさせたのだが、相手は砦内に逃げ込んで出てこない。そこで計略を立て一旦は兵を退かせ、密かに追い込みの柵を作り、其処に選りすぐった兵を潜ませながら、浜辺に舟を並べて即席の舞台を拵え周りを飾り立てて臨時の劇場を開演した。

砂浜劇場では、踊り子に扮装した兵たちが本当のカラオケに合わせて「杵島曲（きしまぶり）」を唄い、踊りに興じて笑いさざめくこと七日七夜、砦に立て籠ってこの様子を窺っていた夜尺斯・夜筑斯の一族郎党は物珍しさに「鎮守様のお祭り」と勘違いし、油断をして家族連れ立って見物に出て来た。そこを芦の茂みに隠れていた軍勢が一気に襲い掛かって全滅させた。残酷な話だが、この際に甚く（いたく）殺したので現在の「いたこ」と言う地名になった―とする嫌な記録がある。

杵島曲とは、肥前国（佐賀県鹿島市）にある杵島山で歌われた歌垣（かがい）唄らしい。：「霞（あられ）降る杵島が嶽を峻（さか）しみと草取りかねて妹が手を取る」：九州の歌を合唱することが出来たのは、遙々と遠征してきた軍隊が九州の部隊だからである。他にも筑波山の名や茨城国造・筑紫刀禰などにも九州が直接に表わされている。建借間も九州の鹿島に由来する名である。

茨城県には鹿島神宮があるが、これも九州に関わり有りで、かつて鹿島町が市制を施行するに際し九州の鹿島市からクレームを付けられ仕方なく「鹿嶋市」にした。「鹿島」は「杵島（きしま）」の訛りとする説もあるから、九州のほうが本場なのであろう。常陸国風土記の香（鹿）島郡にある

香島社（鹿島神宮の前身）の記述は肥前国風土記に似ていると言われ、何らかの関連が窺える。

かつて神社が階級で差別されていた時代に「官弊大社」という最高位を得ていた鹿島神宮は武甕槌命を祭神としている。古事記や日本書紀や、それらの大嘘に基づいて書かれた物語類を信用すれば（信用は出来ないが戦前の教育を思い出して盲信すれば…）鹿島神宮・祭神の武甕槌命は日本に初めて出来た統一王朝、つまり出雲王朝系の有力者であり九州王朝が出雲王朝を併合するに際して最も尽力した神様と言うことになるのだが：一方では次に述べるように、時代は全く違つて近畿地方が九州王朝か出雲王朝に服属するに際しても大きな功績を残した神様（武將）である。

物語の世界であるから百年、千年の違いは無視して話を進めると、神武天皇と言われる人物が率いる西の方から来た軍隊が近畿大和へ進撃しようとして木の国（紀伊）の熊野地方へ入った。「なぜ、遠回りをして熊野へ進んだのか？」疑問を呈した学者が居られたが、確かに大阪湾を船で来て現在の和歌山県との境界付近に上陸し、奈良方面へ行くのに百kmほど離れた熊野を回るのには不自然であり話の内容に作為が感じられる。

これは、太陽神信仰の立場から「神の子孫である」とする征服者が東、つまり太陽が出る方向に向かつて攻撃することは都合が悪い：攻められる敵は西側に居なければならぬので、そういう状況を設定するために迂回の話をしらえた。そのモデルが「壬申の乱」に於ける大海女皇子こと天武天皇の進撃路である：と、遠回りに疑問を持たれたある歴史学の先生が喝破されている。

御意見に大賛成であるが、此処は歴史の嘘に騙

され、その神話の裏を覗いてみると、その時に大きな熊が現れ忽然として姿を消した。場所が熊野なのでライオンが出ては不自然でも熊が出る分には当たり前である。筋書きとしては幼稚ながら、その熊の姿を見た神武軍団は全員が意識不明の重態に陥ってしまった。毒ガスや催眠術を使う熊などは動物学上でも居る筈がないと思うのだが…。

遙か天上からこの様子を見ていた天照大神が武甕槌命に「彼らを助けてやってほしい」と頼んだ。この辺が日本の神話のデタラメなところで、最高の神である天照大神ならば、他の神様に頼まなくても自分の力で救える筈である。頼まれた武甕槌命のほうが残程、現代的で、自分では動かさず持っていた太刀を熊野の高倉下（たかくらじ）と言う暇な神様が倉の中で昼寝をしている枕許に落ちて救援に行かせた。つまり地元の中小企業へ下請けに出したのである。

高倉下は寝ぼけ眼で武甕槌命の剣を担ぎ出し、神武君たちが気絶して死にかけている場所へ出かけた。現場は深い森林に囲まれた荒地のような場所、其処に大勢の兵士たちが倒れていた。高倉下が大きな剣を荒地の隅に突き立てると、あら不思議！全員が生き返った。それどころか熊に化けていた地元の神様も一瞬で退治されてしまった。

物語の現場から考えれば此の高倉下と言う神様は紀伊半島の熊野に居なければいけないのだが、身近な所で、かつて常陸国の「塩の道」の中継点であった小美玉市の倉敷地区にも「潮宮（いたみや）神社」として現在も祀られている。それを「ふるさと“風”の会」主宰・白井啓治さんが見つけてきて案内をして貰った。「此処に在るのは茨城支店だ」と言われると疑問も持てないが、どうも

鹿島灘の塩と砂鉄の権益を握っていたと思われる鹿島神宮の子会社でもあったらしい。

さて、そうなるのと神武天皇の東征―熊野の遭難―天照大神の要請―武甕槌命の救援―高倉下の行動：という一連の物語は怪しくなってくる。遠く離れた熊野の倉の中で居眠りをしていた暇な神様が鹿島灘の塩で商売をする：新幹線も茨城空港も無かった時代に三流の神様が、それほど素早く行動出来る筈がない。信心深い方は「武甕槌命が鹿島神宮に祀られてから高倉下も供をして常陸に来たのだ」と主張されるかも知れないし「地元には熊野ゆかりの人物が居て勧誘して来た」とする説もあるらしいが、高倉下は武甕槌命の家来では無かったようなので熊野から連れて来る必要は無い。

敢えて部下だったとすれば、それならば古事記や日本書紀に「…高倉下（たかくらじ）は常陸国へ行き事業を始めて成功し、名前を“塩倉翁（しおくらじ）”に改めた」という記録がなければならぬ。何しろ神武天皇以来、萬世一系が保たれたのは高倉下のお蔭なのであるから粗末に出来ない神様なのである―にも拘らず、霞が浦の湖岸に地元の人の厚意で建てられた小社に祀られていて参詣する人も居ない―それを皇室や神社にうるさかった大日本帝国時代の警察も憲兵も宮内省も放っておいた：これだけで「日本は神国―萬世一系の皇祖：」は嘘か恩知らずのどちらかになる。

古事記でもう一か所、武甕槌命が登場するのは出雲王国が開発した国土を大和朝廷に奪われる―言い方を変えれば大國主命から強引に「国譲り」をさせる場面である。この嫌な役目をさせられたのが武甕槌命であるから、その功績で鹿島神宮に祀られた。鹿島神宮の創建は社伝では神武天皇の

時代となつていようであるが、これは神武天皇が一番にお世話になつたとする伝説からのコジツケであり歴史的には天智天皇時代か、その少し後と考えられている。これも明確な文字の記録が残されていないから眞實が掴めないのである。

(つづく)

【風の談笑室】

2月6日曜日。美浦村の陸平遺跡にある文化財センターで、陸平をヨイシヨする会の主催する縄文の森コンサートに、ことば座の「朗読舞」が招かれて、公演を行った。

今回のコンサートは、朗読舞を中心に、ことば座の音楽を担当している野口さんのオカリナ演奏も合わせて行われた。

この陸平をヨイシヨする会とは、三年前に、現在会長をしておられる市川紀之さんの主催している美浦村の市民劇団「宙の会」の公演に出かけたことから交流が始まったのであった。

初めて、宙の会の公演を美浦村の公民館で見たとき、村民の皆さんの応援の熱心さ、多さに驚いたのであった。たまたま、風の会を応援してくださいと書いてある合田氏からのお話で公演を知り、兼平さんを誘い出かけたのであったが、兼平さんも村民の応援ぶりに圧倒されたのであった。そして、そのことを当会報に書いたことから、市川さんとは交流が始まったのである。

ことば座の公演にも何度もお越しいただいた。昨年、春に、陸平をヨイシヨする会というのが

あり、そこで毎年縄文の森コンサートを開いているのだが、今年度のコンサートにことば座の公演を、というお話を頂き、即断に了承したのであった。

6月の公演には、ヨイシヨの会の方々がコンサートの企画見学会のため、観劇頂いたのであったが、その中に、モダンダンスの柏木久美子さんがおられ、縄文の森の公演の時に、可能であればぜひ小林さんと一緒に舞を舞ってみたいとの申し入れがあった。私と出会って初めて舞台表現に接した小林幸枝にとって、出来るだけ多くの表現者たちとの接触を持たせ、学んでもらいたいと願う私にとっては即断に了承を出したのであった。

実際のところ、柏木さんはどのような経歴の方かは知らなかったし、その経歴によってコラボレーションを拒むものもなかった。小林の舞を見て、一緒に舞ってみたいと感じる感性が気に入ったのであった。これは野口さんと出会った時も同様であった。この人なら小林と表現を一緒に構築できると感じたのであった。

12月も大晦日に近づいた時であった。1月からの稽古の打ち合わせを兼ねて、柏木さんに会った時、彼女の経歴を示す資料を頂いて、驚いた。私の懇意にしていた演出家の奥さんの後輩であったのだ。

柏木さん達の師は、演劇人であれば知らない者はいない、日本のモダンダンスの祖といえる伊藤道郎である。柏木さんは、直接に師事した年代ではないのであるが、現在のイトウ同門会の会長をしている。

演劇・バレエ・ダンス・映画などの芸能の世界

は狭いので、少し知り合うと大抵が誰かにぶち当たるものであるが、石岡に来て誰かに出会うとは思ってもよらなかった。

しかし、考えてみると、私が小林幸枝に出会い、彼女の手話の表現に舞の要素とスケール感があると感じたのであるから、舞踏の関係者であれば私と近いものを感じたとしても不思議はないのである。

特に芸術的表現者にとっては、常に既成を打ち破るべき前衛を模索しているものであるから、小林が柏木さんの目にとまったとしても何の不思議もない。さらに言えば、詩の朗読に舞うという事に何の抵抗感もないというのは、伊藤道郎の門下生以外の何物でもない、とは今だから言えることではある。

さて、コンサート当日の舞台は実に愉快なものであった。舞台設定には多少の問題があったが、それ自体は最初の条件であるから、その分を差し引いて考えても十分にお釣りの来るほどの出来栄であったと思う。

大会議室のような会場であったので演者と観客が同一面上にあって、観客の人には少し不幸であったが、十分な満足はいただけたであろうと思う。

柏木さん、小林の舞は、前衛的幽玄の舞とでも言うべきものであったと思う。これを劇場で再現したら、見た人たちは前衛的幽玄の舞と言っても、「えうだ」と納得するであろう。

この公演で、最も感心させられたのは、陸平をヨイシヨする会の方々の、心温まるコンサート作りの姿であった。私と兼平さんが最初に宙の会の公演をみて感じた、村民一体となった舞台

つくりのそのままが文化財センターにもあったことである。

「風に吹かれて」で、閉鎖的に卑屈で姑息なブライドだけを振りかざし、一番大切な足元に目を向けることのできない文字だけの「歴史の里」と書いたが、この石岡市には実にうらやましい事であった。美浦村や東海村の文化度の高さを口にするに直ぐに、あそこは財政的に豊かだから、とずれた返答を言われるが、財政の問題ではない文化力の差を感じてしまう。

他人の庭は立派に見えるだけならいいのであるが、もう少し自分の庭を目守り、自慢を築き上げたいものである。

さて今月は紙面にだいぶ余裕があるので、風の会と兄妹関係にある「ことば座」と「朗読舞」について改めて少し紹介してみたい。

『朗読舞とその周辺環境について…』

(朗読舞とは…)

朗読舞は、脚本・演出家の白井啓治が、石岡生まれ、石岡育ちの小林幸枝と出会い、彼女の生まれ持った動作表現の稀有なスケール感に触発されて、日本の古典芸能である人形浄瑠璃や能などを基に創出した、全く新しい舞台表現です。

(ことば座は…)

ことば座は、常世の国の物語りを聾女優の小林幸枝が朗読に乗って手話を基軸とした舞演技に表現していきこうと立ち上げた朗読舞劇団です。

「ことば(言葉)」とは、「心を口に繁らす」ことをいいますが、心とは真実、口は表現の手段、

葉は紡ぐことをいいます。「ことば座」は、この言葉の原義に基づいて、物語に紡がれてある真実としての未来の夢を「朗読」と「手話を基軸とした舞」という二つの言語によって、自由で自在な舞台表現を創造していきます。

ことば座が取組んでいる朗読舞及び朗読舞劇は、日本の古典芸能である能や人形浄瑠璃をヒントに、朗読語を手話言語をベースにした舞技で演じるというもので、脚本：演出家の白井啓治が小林幸枝のために創案した石岡に生まれた新しい舞台表現です。

× × ×

文章を手話で朗読をすることはこれまで行われてきましたが、朗読舞は、朗読を手話に通訳して表すというものではありません。詩にかかれていた内容を自分なりに解釈し、言葉の持っているリズム感にのって、動作をサイン化した言語である手話をベースにした舞として表現していきま。

詩というのは心に感じたこと、想うことを説明を省いた(無駄を省いた)最小限の言葉にして、文章に紡ぐことをいいます。

言葉というのは、心を口に表すというのがその原義です。心というのは自分自身の真実のことをいい、口は声を意味しますが、考えや思いを「表す手段の総称」で、これを「言語」といいます。

表現の手段となる言語には「動作言語」「音声言語」「文字言語」「光言語」「形状言語」というようにいろいろなものがあります。そのなかで一番最初にできたコミュニケーション言語が「動作言語」です。

高度な音声の言語を持つようになったのは、人間が二足歩行を行うようになって、かなり過ぎたからのことです。因みに、人間が道具を使うようになったのはおよそ二百万年前のことです。最初の人間といわれている猿人の頃は、他の動物と同様に音声言語というのは危険・安全・威嚇を伝えることがその主たるものだったといわれています。そして、喜怒哀楽などのコミュニケーション言語は動作言語が中心であったと考えられています。

人間の歴史から考えると声言語が中心となったのは、ごく最近のことです。我々と同じ人(新人・クロマニヨン人)が誕生してからの歴史は約五万年ですから、地球に人の原型である猿人(アウストラロピテクス)が誕生してからの歴史(千四百万年)からすると一瞬のようなもので、音声言語がコミュニケーションの手段として使われるようになったのは新人と分類される現在人になってからですから、それ以前の動作言語のほうがはるかに長い歴史を持っており、私たちのDNAの中には千四百万年の歴史として豊かな動作表現能力が組み込まれているのです。

私たちは楽しいことがあると身体が弾むように動きます。逆に哀しいことがあると動作も寂しくなってしまう。そうしたことを誇張して表現するのが踊り(舞・ダンス)で、犬が嬉しむときに、飼い主の回りをグルグル走り回るのは、広い意味で嬉しさを表現したダンスをしているのです。

人間をはじめとして動物は舞を舞うことで、感情を表現したり、感情をコントロールするとい

うことを本能的に知っています。人間の感情を表現する最初の文化はリズムと踊りと言われています。これは、心臓の鼓動に大きく関係があり、情動の変化に連動して心臓の脈拍が変化することに大きく関係しているといえます。

人間にとってリズムに乗せて身体を動かすことは一番自然な感情表現であり、同時に踊ることでその感情をさらに高めることができます。

古代人が戦の前に、力強く足を踏み鳴らし踊るのは、そうすることで気持ちが高ぶり戦意が向上するからです。逆に、目を閉じてゆったりと波間を漂うように身体を揺らしていると気持ち

が自然に安らいでいきます。このように舞うという動作には、音質とリズムの強弱と相まって人間の精神面に大きな影響を与えてくれるのです。

音声言語から生まれた言葉というのは、音質やリズムの快・不快がそのベースになって、長い年月をかけて、人間の英知として創られてきました。だから、音声言語の延長線上に生まれた文字言語には、音とリズムが内包されていますから、文章として紡がれた詩には舞を引き出す譜面があると言えます。

どの国の言葉にも、無表情な言葉はありません。だから、正確な意味は解らなくても、おおよその快・不快は、英語がわからなくてもスペイン語がわからなくても感じ取ることができます。これは、生まれつき音声の聞こえない人達であっても、その国語圏内に生活していれば生本能として感じ、理解することができます。

最近では肉体で自己表現をするものすべてをパフォーマンスという言葉で表現するようにな

り、スポーツも演劇もダンスも芸術・芸能分野のすべてを包括して使われています。

朗読舞は、詩や歌を朗読と動作の両面から表現するパフォーマンスですから、詩や歌から感じ取ったものを動作言語である手話を軸にして、自分流に楽しく舞うという風に考えて楽しんでいただけたら、と思います。

全くの無の状態から舞を創造することは、舞踏家でない限り難しいことですが、動作言語であるサイン・ランゲージ(手話)を基本にして考えれば、誰でも自分流の、気持ちの良い舞を創造することができます。

朗読舞は、自分で創った詩や短歌をはじめ、万葉集や古今和歌集、百人一首などを朗読しながら舞うことができますから、平成の仕舞いとして楽しんでいただけるのではないかと思います。

朗読劇・朗読舞劇研究生募集!!

あなたの隠れた才能を
ことば座に発見してみませんか

ことば座では、朗読舞及び朗読舞劇に朗読する、朗読俳優および朗読舞俳優志望者を募集しております。

研修期間は12ヶ月。

演劇としての朗読の基礎と演技手話を学んで頂き、研修後は、ことば座劇団員として活動して頂きます。

◎募集要項

募集コース：朗読劇&朗読舞劇俳優養成コース

募集人員：6名程度(最大10名まで)

※面接及び朗読と簡単な表現試験有り

養成期間：1年(入塾は随時受付しています)

指導は月4回~6回

受講料：月額30,000円(全・半納割引有り)

※詳しくは、ことば座事務局
0299-24-2063(担当:白井)まで
お問い合わせください。

編集事務局
〒315-0001
石岡市石岡13979-2
TEL 0299-24-2063
(白井啓治方)
<http://www.furusato-keze.com/>

《ふる》

ピザ・パスタ・アレンジ蕎麦・蕎麦会席
料理のお店です(ギター文化館通り)

看板娘(犬)「うしろ」ちゃん
皆さんをお迎えいたします。

電話0299-46-0000

ギター文化館 2011 CONCERT SERIES

第一回 里山と風の声コンサート

野口喜広のオカリナと

白井啓治の詩の朗読

3月6日(日曜日)開演 PM3:00(開場 PM2:30)

常世の国へふらりと迷い込み、雑木林と風に語りかけるしか術を持たぬ瘦男白井啓治と常世の海と陸に魅せられ大地に母の詩を土笛(オカリナ)に声する夫(つま)野口喜広と妹(いも)矢野恵子が出会い一緒に風に声することになった。

ギター文化館 Tel 0299-46-2457 コンサート料金 入場券 ………3,500円
Fax 0299-46-2628 (事前にご購入の場合は3,000円) 小学生2,000円

ギター文化館発

「常世の国の恋物語百」

ふる里とは、物語の降る里です。ふる里に降り落ちた物語は未来への道標。守るべきは里に降り落ちた物語を確りと伝えることです。

ことば座は、里に降り落ちた物語を朗読と手話を基軸とした舞(朗読舞)に表現し、明日の夢を伝える劇団です。

2011年「ことば座」定期公演

第20回公演「常世の国の恋物語百:第27話」 6月17日~19日

第21回公演「常世の国の恋物語百:第28話」 11月11日~13日

ことば座 315-0013茨城県石岡市府中5-1-35 ☎0299-24-2063 Fax0299-23-0150